

4月13日(木)

おはようございます。

シャンテ・デーヴァというインドのお坊さんがいて、その人の本（お経）を私はよく読み、いつも自分の心の羅針盤のようにしています。いつ頃の人かという点で、日本では奈良時代に生きた人です。日本のお坊さんで言えば、行基と同じ頃です。行基はみなさんも知っていると思いますが、東大寺建立にたいへん尽力したお坊さんです。

さて、私はこの方が書いた「入菩薩行論」をいつも心の戒めとして参考にしています。第一章の最後のところに、「諸々の菩薩は重大事態に陥っても悪業を生ぜず、自然に善行が増大する」というセンテンスがあります。これが私にとって大切なセンテンスだと思っています。たとえば、私が日頃朝礼台に立って立派なことを言っているのに、重大事態、つまり大変難しい事態に陥ったりしたら、ハレーションを起こしてしまい、日頃は立派なことを言っているのに、いざとなったら無茶苦茶になってしまうということがないとは言えない。

失礼かもしれないけれども、森友学園の理事長先生も日頃は立派なことを言っているのかもしれませんが、重大事態に陥ったら無茶なことになってしまった。大概の人間はそういう傾向がある。けれども、シャンティレーバーは、重大事態に陥ったときにこそ、そこにその人の真価が発揮されると考えよということを行っているのだと思います。

かつて幕末に松下村塾を作った吉田松陰という人がいます。そこから高杉晋作や伊藤博文など多くの偉人が出ました。この吉田松陰が日本のことを心配して、黒船に乗ってアメリカに密航しようとした。一人で夜に黒船に乗り込んだのだが、当時日本は鎖国をしていましたから、そういう行為は死罪になる。吉田松陰は英語もろくに話せないのだけれども、船に乗っていたアメリカ人たちには、彼が明らかに教養の高い人間であることが分かったという。また、立ち居振る舞いの丁寧さや態度の潔さに彼らが大変感銘を受けたということも文章に残っています。それで彼らは、アメリカに連れていくわけにはいかないのだけれども、死罪になってもいけないと思い、日本政府に対して絶対に死刑にしないでくれという嘆願書を出すのです。こういうことを、重大事態に陥っても悪行を生ぜず、自然に善行が増大するというのだと思います。

やはりいつも言うように、これからは情報化社会で、変化の激しい時代です。それだけにハレーションを起こしやすい。思い通りに

ならずうまく行かないことが多い。そんな重大事態に陥ったときこそが、自分の人格が試され、本当の力が発揮される場所なのです。日頃うまく行っているときはだれでも機嫌はいいし、嫌だと思っている人とでも、上手に話ができるでしょう。しかし、うまく行っていないとき、また重大事態に陥ったときにこそその人間の真価が表れるのです。そのとき吉田松陰のように、アメリカ人に拒まれ、密航がうまくいかず、死罪になることがはっきりしたときでも、その態度の潔さ、そしてその態度の丁寧さがアメリカ人の心を打った。だから彼らは嘆願書を提出したのです。重大事態に陥ったときに吉田松陰の教養や人間力という真価が発揮されたのです。これは重大事態に陥ったときに人間の真価（覚悟）が発揮されることでかえって道が開けるということを物語っています。

ホリエモンこと堀江貴文が逮捕されたときに、これまで世話になった人は一人もいなかったと言った。しかし刑務所から出て来たときには、彼に世話になった人たちがみんな応援してくれたそうです。これも一つの人間性の真価が発揮された例だと思えます。

私も自戒の念を込めて、「諸々の菩薩は重大事態に陥っても悪業を生ぜず、自然に善行が増大する」ように努めていきたいと考えています。いろいろ難しい事態に遭遇したときハレーションを起こさずにきちんと対応できるかということ、そういうときにこそ自分の真価が発揮されるのだと思っています。

諸君もそうあるように心がけてほしいなと思います。今朝の話はこれで終わります。

学校長